

見えない、見えにくさのある乳幼児への支援は、
まなびアイサポートセンター（盲学校）にご相談ください。

なぜ、0歳からの早期支援が必要なのでしょう？

1 見えにくさから生じる困難を補うための支援を早期から行うことで、子どもが本来持っている力を十分発揮することができるようになります。

● 視覚障がい児が抱える困難さとは？

視覚からの刺激や情報が十分に得られない視覚障がい乳幼児は、外界への興味・関心を持ちにくく、そのことが、さまざまな発達の側面に影響を及ぼしがちです。また、周囲の状況の把握が困難なことにより、未知なものに対する不安感や拒否感が生まれ、行動が制限されてしまうこともあります。さらに、視覚的模倣の難しさは、姿勢や運動・動作等を身につけることを一層困難なものにするという課題があります。

2 視力は早期から正しく「見ること」で発達し、知的な理解も高まります。

● 機能弱視（屈折異常）が見つかった場合、眼鏡、コンタクトレンズを使用したり、アイパッチによる治療を行ったりして、しっかり見ること、目と手を協応させることで視力が向上します。

● 幼児期にピントの合わない網膜像を脳に送っていると脳が鮮明な形や文字を認識できず弱視になります。正しく認識する機能を訓練することが大切です。

3 家族への支援

● 初めて視覚障がい児を育てる家族は、子どもの障がいへの不安、育児の不安、将来への不安など多くの不安を抱えています。家族の気持ちにより添い、その不安を受け止め、将来への見通しをともに考えて家族を支えていくとともに、適切な家庭教育につなげていくことが大切です。また、同じ思いを抱える家族との交流の場を設けることも有効です。

まなびアイサポートセンターでは、0歳からの早期支援を行っています。

<0歳からの早期支援・保護者支援>

○遊びを通して「見る力」「触って理解する力」「環境を把握する力」などを高めます。

○「よく見て理解する力」「手で操作する力」「位置関係の理解」「効率のよい目の使い方」「弱視レンズの使い方」などを学びます。

○基本的な生活習慣、遊び、家庭での子どもとの関わり方など、子育てについて、保護者と一緒に考えます。

○保育園・幼稚園等に在籍しながら相談、支援を受けることができます。

○保護者の方が集う機会を設け、保護者同士の交流をはかります。

早期支援の実例

＜ケース1・・・1才から継続して支援を受けている事例＞ 四日市市在住（弱視）～保護者から～



6歳の娘は先天性の障がいで弱視、色覚異常があります。盲学校には1歳からお世話になり始めました。視覚障がい児の子育てについての情報が得られず困っていましたが、盲学校では先生から具体的なアドバイスを受けることができ、親子のつどいでほかの親御さんと交流できたことで不安が軽くなりました。3歳からはひだまり教室に通い、娘は先生やお友だちと一緒に楽しみながら、様々な体験をさせていただくことで多くのことを学び、視力を補う力をつけていきました。また、娘は皆と違う自分に気づきつつ

ありながらも、劣等感を感じたり自分を否定したりすることもなく、地域の園とともに盲学校に並行して通えたことが精神的な安定にもつながっていたのではないかと思います。入園当初は怖がり、不安そうにしていた娘でしたが、今ではお友だちと積極的に関わるようになり、外を走り回り、いろいろなことに挑戦するようになるなど、この3年間で心身ともに大きく成長したことを実感しています。盲学校での早期支援を受けられたことは親子共々、貴重な財産になりました。

＜ケース2・・・見えにくい目を使い、視力が伸びた事例＞

伊賀市在住（弱視）両眼水晶体亜脱臼（右0.2 左0.7）

3歳半検診で、右目の弱視がわかり、保健師さんから盲学校に連携依頼の電話をいただく。保健師さんとともに保育園に巡回し、本児の観察をするとともに、保護者からの相談を受ける。保育園、保護者、盲学校の三者が情報の共有、連携をとることで「意識して見えにくい目をしっかり使う事」を行い、1年後右目の視力が0.6まで伸びてきている。



三重県立盲学校にご相談ください。

見えない、見えにくさのある乳幼児への支援は、早期発見及び関係機関との早期連携がとても大切です。このため、三重県立盲学校では三重県内にお住まいの「見えない・見えにくい」お子さんとそのご家族への早期支援の充実を目指しています。目に関することでご心配のある方がいらっしゃいましたら、まずは下記までお電話ください。

ご相談・お問い合わせ

まなびアイサポートセンター（三重県立盲学校）

514-0819 三重県津市高茶屋4丁目39-1

電話 059-234-2188（代表）

FAX 059-234-2189